

多谷昇太

◆ 風吹かず ◆ (二)

晩秋の川霧ふかき宵闇に死の家ごとく浮かぶ家は
も

寅年のわれ老ひければ龍の年相喰み負けてガンと
なりしか

土気色おぞしきほどのわが肌はガンに応ふる死に
装束たり

胆管の癒着はげしく腫瘍大手術否めばいのち失せ
なん

苦しきは胃カメラ飲み内視鏡身もて知らるる不
摂生の報い

業平のいつか行く道とおぼへどもうつしとなれば
踏み出しかねつ

ガン患者為すすべなくて伏す私の夢のなかでは立
ち騒ぐらむ

夜九時に寝ぬるものは消灯時ラッパ鳴らねど兵
舎おもはる

うばたまの夜こえるらし今宵またおぞしき夢とて
行かな眠らな

死ぬるとて誰と相見ん語るべき人 間 失格隠すべ
くなし

怒るをさへ愛に受くべき看護師(ひと)のみて我は
驚きすなはち恥じつ

廊下をば人のしば通るさはあれど我に来ぬべき見
舞客ばかり

ガン癒えて命ながらふ幸あればあれせむこれせむ
人に見えむ

九時間の手術おはりて目を覚ます我しはおぼへず
医師の倦むこる聞く

熱くかつ寒く激痛止まずわななききいまさら知れ
る命の瀬戸際

退院の朝は来たりぬうつそみの世にぞ帰らん改め
の世や

六十（むそ）余年過ぎにしわが世返すならおのれ変
へてぞ真とすべし

年寄りの冷や水ならぬ新人（あらひと）ぞ老ひても
いよよ務むるが性

憂き世経てとありかかりともなにかはせん魂（たま）
の御風に塵と吹かせよ

かたければくづしてつながん仮名のごと人の心も
いでかくてこそ

彼我一如吾（わ）と汝（な）がために鐘は鳴る死の
定めやは生（あ）れしゆる途ほふ

せしことも習ひもつかぬことなれど他を思ひなむ
強ひを尽くして

人もがな汝（なれ）と汝（な）がこと伺ひたし聞ら
く少なく云ふらく多み

「なむ」をすゑつづり終へたし我がことを快・暴流
の身ただ仕舞ひたし

松返り痴れ者愚者はすさぶまじ言挙げせしを空ろ
とせなく

想念の悔ひと改め行のそれ働くさまは比べかぬる
かな

友来香（ゆうらいしやん）睦むほどにぞ癒さるる心
観せばむべ、人の間なり

道はづし吾（わ）が荒（す）ぶほどに傷つけるはら
から見ればやがてはあらじ

誰も知る積み木崩しの幼さを旧りても続く正さぬ
かぎり

すね者の独り身ままのあさましさなど聞かばしも
さ在るとなくに

いささ川夢にあらはれ吾（わ）を浸すぬるき流れぞ
胎内（ふるさと）ごとし

夢中におもふどちらの声あはせ名乗らせたまへと
我を推すめり

空おほふ扇とも見ゆうろこ雲そこゆ風吹く天衆あ
ふぐか

歌詠みは時空を超えて呼ばふなり歌神歌聖よ訪ひ
たまへ

かへりなむあの日あの時ガン臥所もばら終りと覺
えしものを



—以下二首 大阪釜ヶ崎の人々に身を奉げきつた医師、矢島
祥子さんを詠む。先達と慕えばこそ—

蟻のまち愛の医師（くすし）のゐたまひき魔の殺め
しが光いや増せり

クオバディスドミニ君慕はしや暁（あかつき）に復
活しませさがため励む





釜ヶ崎市愛隣地区で活動する矢島祥子先生

〔和歌集蛇足〕「ガンはやさしい病氣」と何かのエッセーで読んだ覚えがあります。なぜかと云うにガン(死)の宣告を受けてからまだ幾許かの時間が与えられるからです。

猶予の思いは雲散霧消し、今までの自分の人生と向き合わざるを得なくなる。誰もです。その自覚と覚悟をガンは与えてくれるのでそう云われるのでしょう。私もそうでした。しかし幸運にも東海大付属病院で手術・治療を受けて俗世に復帰できました。カミュの「異邦人」が死刑を免れて放免になったようなものです。その折りの嬉しさと気概を歌集の「退院の…」に認めて生き直しを計ったのですが…。しかるに世の不条理は相も変わらず私を待ち受けて居(歌集六・七にて詳術しました)、カンダタこと私の足を離しません。幾そ度か数えもできぬうっ屈に沈み行くしかないのですが、しかし世の不条理と云えば上記紹介の矢島先生に起きた厄事ほど不条理なものはありません。先生が引かなかったように、私も引くことはできない。七転び…どころか七千転び八千起きであっても老兵行脚の転戦を続けます。「※次回はしかし不条理へのうっ屈を現代短歌をまじえて一度詠みます。はた、理解を被る為か、自省を誘う為か、定かではありませんん…」